

## 南アジアにおける 4 言語グループの分布と特徴

言語研究班

大西 正幸・児玉 望・長田 俊樹・高橋 慶治

言語研究班は、寺村裕史の協力のもとに、『南アジア言語地図』を作成中であるが、今回は、そのうち、南アジアにおける主要 4 言語グループ＝インド・アーリア、ドラヴィダ、ムンダ、チベット・ビルマ－の話者のおおまかな地理的分布と、各グループの概説を掲載する。

言語地図は、各国のできるだけ新しい人口統計に基づいて作成されている。この地図によって、南アジアにおける各言語グループのおおまかな分布を見ることができる。

ただし、国／地域によって、まったくデータが得られなかったり、言語情報に偏りがあったりする上、技術面でも未解決の問題が残されている。従って、今回の地図は、最終版に至る前の試作段階のものとして理解していただきたい。特に、パキスタン、バングラデシュ、ネパールにおける少数言語の分布を、より正確に地図に反映することが、今後の課題である。

下に、国別のデータの統計年度ないし出典と、各グループ話者数の総人口に対する推定パーセンテージを、表で示す。

表 1 各言語グループ話者数の総人口に対する推定パーセンテージ

	インド・アーリア	ドラヴィダ	ムンダ	チベット・ビルマ
インド (1991/1981)	75.5	22.4	1.0	1.0
パキスタン (1998)	76.4	—	—	—
バングラデシュ (1974)	99.1	—	—	—
ネパール (2001)	79.1	0.1	0.3	18.6
ブータン (Van Driem 1991 に基づく推定)	25.9	—	—	74.1
スリランカ (2001/1981 に基づく推定)	75.2	24.1	—	—
モルディブ (2007 に基づく推定)	100	—	—	—

以下、各言語グループの概説を掲載する。

### 1 インド・アーリア諸語

大西 正幸

総合地球環境学研究所

#### 話者人口

インド・アーリア（以下 IA）諸語は、話者数から見ると、南アジアで最も大きな言語グル

ープである。IA 諸語の母語話者の総数は、南アジアの人口の 4 分の 3 以上を占める。

## 言語分布

IA 諸語の分類には諸説あるが、ここでは Cardona 1974, Cardona and Jain 2003:18 に従い、下の 4 つの地域グループに分ける。

	代表的な言語
西北グループ (Northwestern IA)	パンジャーブ語、シンディー語、カシュミール語、サライキ語
中央グループ (Midlands IA)	ヒンディー語、ウルドゥー語、ネパール語、マイティリー語
東グループ (Eastern IA)	ベンガル語、アッサム語、オリヤー語
西南グループ (Southwestern IA)	グジャラート語、マラーティー語、コーンクニー語、シンハラ語、ディヴェヒ語

このような地域別分類は、中期 IA 諸語 (MIA) にまで遡る、さまざまな音韻／形態上の特徴に基づいてなされるが、そのどの要素に重点を置くかによって、境界線の引き方に大きな差異が出てくる。

上に「代表的な言語」としてあげた諸言語は、南アジアのいずれかの国／州で高い公的地位を認められているものである。

インドでは、上にあげた 13 言語 (サライキ語、コーンクニー語、シンハラ語、ディヴェヒ語を除く) にサンスクリット語を加えた 14 言語が、憲法の第 8 付則により使用促進が望まれる「指定言語 (scheduled languages)」として認められている。このうち 10 言語は、一つ以上の州ないし連邦直轄地の公用語として認められている (マイティリー語は、2003 年に指定言語のリストに加えられた)。また、パキスタンの最近の人口統計では、パンジャーブ語、シンディー語、サライキ語、ウルドゥー語の 4 言語が主要言語としてあげられている。ネパール語は言うまでもなくネパールの公用語、シンハラ語はスリランカの公用語、またディヴェヒ語はモルディブ共和国の公用語である。

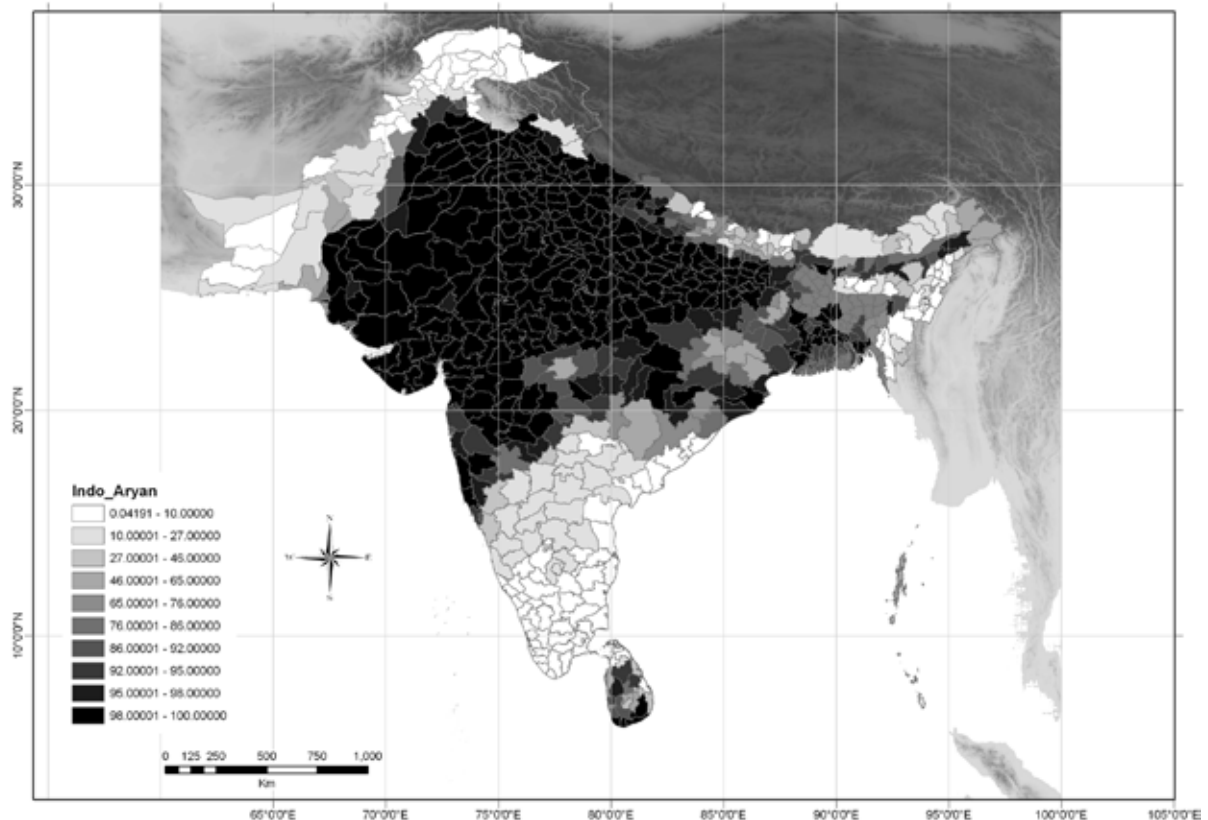
この他、インド、パキスタン、ネパールの各地には、IA 語派に属する少数言語が分布する。また、ジプシーの言語として知られるロマニー語も IA 諸語に属するが、その話者はヨーロッパを中心とするユーラシア大陸西部に分布していて、南アジアにはほとんど存在しない。

## 歴史

IA 諸語は、ユーラシア大陸の西端から南アジアまで広く分布する、インド・ヨーロッパ (IE) 語族のうち、最も東に位置する言語グループである。このグループの言語は、現在パキスタン、アフガニスタン、イランに分布するイラン語派の言語とともに、歴史的には一つのグループ (インド・イラン語派) を形成していた。

紀元前 2 千年紀のはじめ頃から、このインド・イラン語派の言語を話す人々の一部が、徐々にインド北西部を通してインド大陸に移り住み始めた。彼らが自らを「アーリア人」と呼んでいたことから、その言語をインド・アーリア (IA) 諸語と呼ぶ。

IA 諸語は、その歴史的な発生の順序に従い、古期 (OIA)、中期 (MIA)、近代 (NIA) に分けられる。それらの言語が生活言語として使われていた時期は、Masica 1991 によれば、だいた



インド・アーリア諸語諸語の分布

い次のようである。

OIA (BC 1,500 - 600)

MIA (BC 600 - AD 1,000)

NIA (AD 1,000 -)

OIA は、いわゆるサンスクリット語である。文献上得られるその最古の資料は、紀元前 2 千年紀の半ばから終わりにかけて成立したとされる、祭祀用の讃歌を集めたリグヴェーダ。その後、宗教／哲学的な内容を持つ、さまざまなヴェーダ／ウパニシャッド文献が続く。これら、初期の OIA 語を、ヴェーダ語、ないしヴェーダ期サンスクリット語と呼ぶ。これに対し、紀元前 500 年頃成立したパーニニの文法書アシュターディヤーイーは、この頃使われていた後期 OIA 語の詳細な文法記述として有名である。この記述を規範として文語として確立された「古典」サンスクリット語は、生活言語としての機能を失った後も、文語として特別の地位を与えられ、ヒンドゥー教のさまざまな教典／法典や、叙事詩／劇などの文学作品を生んだ。

MIA は、紀元前 3 世紀のアショカ王碑文に記されたインド各地のプラークリット語がその最初の記録である。プラークリット語は、西インドの規範言語とも見なされるマハーラーシュトリー語、西インドの古い地域語の特徴を持つ小乗仏教の仏典言語パーリ語、東インドの地域語の特徴を持つジャイナ教の言語アルダ・マーガディー語等に代表される。プラークリット語が、サンスクリット語と並ぶ文語としての地位を確立するにつれ、紀元 5-6 世紀頃からは、アパブランシャ語と呼ばれる各地の口語が文献に登場するようになる。これらのアパブランシャ語が、

NIA 期の地域語の中核となり、上にあげた諸言語を生んだ。

## 文字

インドでは、古くから、カローシュティー文字と、ブラーフミー文字の、2 種類の文字が使われていた。(前者はセム系のアラム文字から形成されたもの。後者もセム系文字起源説が有力である。) 両者の豊富な例は、紀元前 3 世紀のアショカ王碑文に残されている。このうち、カローシュティー文字は北西インドでのみ使われ、紀元 4 世紀以降姿を消したが、ブラーフミー文字はその後インド各地で派生し、NIA 諸語や近代ドラヴィダ諸語で使われている文字へと発展した。

ブラーフミー文字は、紀元 3、4 世紀頃には北方系と南方系の 2 種類の原型ができ、それぞれが次のように派生して、NIA 諸語の文字となった。

			代表的な言語
北方系	シャールダー文字系	グルムキー文字	パンジャーブ
	クティラー文字系	ナーガリー文字	ヒンディー、マラーティー、コーンクニー、ネパール、グジャラート
		原ベンガル文字	ベンガル、アッサム、ビシュヌプリヤ、オリヤー
南方系	パッラバ文字系		シンハラ

この他、ムスリムの話者人口が大多数を占めるウルドゥー語、カシュミール語、シンド語では、ペルシア＝アラビア系文字が使われ、また、コーンクニー語では、ラテン文字に基づく文字体系が用いられている。

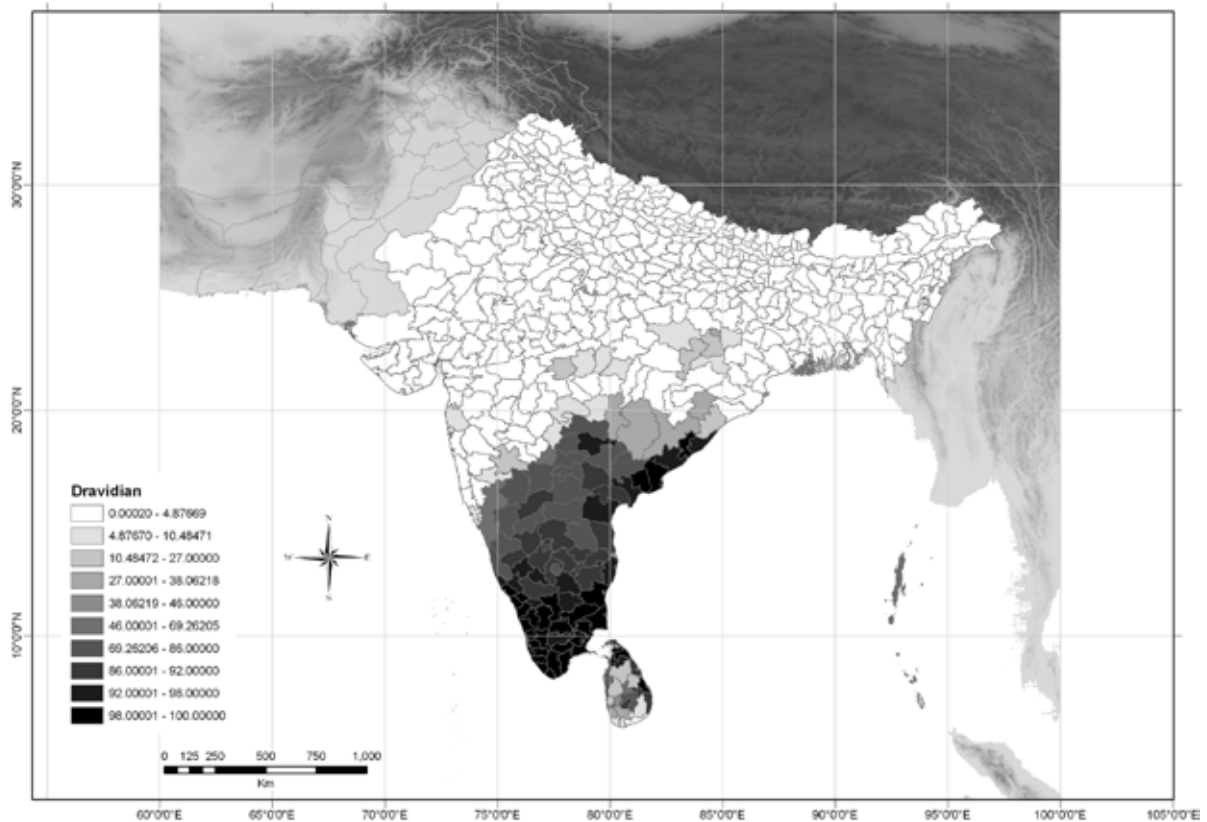
## 2 ドラヴィダ語族

児玉 望

熊本大学文学部

### 分類と言語史

ドラヴィダ語族は、文学伝統を持つ主要言語からコミュニティー単位の少数言語までさまざまな言語を包含する。系統分類にはいくつかの説があるが、どの分類でも一致している区分は、北西（ブラフミー）と北東（クルフ、マルト）、中央（コラミ、ナイキ、パルジ、ガダバ）と地理的に分布の重なる中南部（ゴンディー、コンダ、クーイ、クヴィ、ペンゴ、マンダ）、そして南東（テルグ）、南西（トゥル、コラガ）、そして南部語派（タミル、マラヤーラム、コタ、トダ、イルラ、コダグ、カンナダ）の 7 支派である。南部語派の親縁性は形態の対応から明らかであり、分岐が比較的最近であることを物語るが、タミル語に残る文献資料や地名から、紀元前後には南部語派の地理的拡散と内部での言語分岐がすでに進展していたことがわかっている。タミル語、カンナダ語、テルグ語、マラヤーラム語は長い文学伝統を持ち、インド独立当初から憲法に定められた公用語である。トゥル語とコダグ語は、一定地域の諸コミュニティー



ドラヴィダ語族の分布

において話され理解される地域共通語であり、書かれることもある。その他の言語は、通常は特定のコミュニティーに結び付けられるいわゆる部族語である。タミル語は 2004 年にインド政府から「古典語」という認定を受け、カンナダ語とテルグ語もその後を追って認定を受けた。

### 地理的分布

地域の多数言語としてドラヴィダ系言語の言語州を構成する南部 4 州と、それ以外の地域での少数言語としての分布が比較的是っきりと区別できる。アーンドラ・プラデーシュ、カルナータカ、ケララ、タミル・ナードゥ 4 州のすべての県でドラヴィダ語話者人口が過半数を占める。その比率はケララ、タミル・ナードゥ、アーンドラ沿海地方の農村部で 100% に近いが、西側のカルナータカ州およびアーンドラ・プラデーシュ州北部では、インド・アーリア系言語が高い比率で混住する。インド・アーリア語とドラヴィダ語の境界は、西側ほど南に寄るが、このような多言語状況も、インド・アーリア語話者の漸進を示すといえるかもしれない。境界の中部から東では、境界の北側に向けて、ドラヴィダ系部族言語が少数派人口を形成する地域がムンダ語地域と重なって広がる。これらの部族人口は、通常は特に人口比率の高い地域を一つ以上持っている。大きな部族言語は、インド・アーリア系の多数派に分断される形で、時に別名で呼ばれる地理的に離れた集団をもつ。言語的に親縁な各系統（北東・中央・中南部）の分布も、北では類似した分断状況となっている。このような分布は、本来のドラヴィダ語の広い地域にインド・アーリア系言語が侵入した、という説明によく合うが、ただし、これらの部族民自体が移動した可能性も否定できない。

## 類型の特徴

ドラヴィダ語族の言語は、左枝分かれ型の語順類型や反り舌子音の存在など、インド諸言語に共通の類型的特点を持ち、インド言語圏の基層言語と考えられる場合もある。一方で、サンスクリットやウルドゥー語からの借用語やそれに伴う借用音の存在など、インド言語圏・インド文化圏的な特徴も指摘されよう。ただし、このインド言語圏的な特徴は、必ずしもインドに限定されたものとはいえず、これが日本語を含むさまざまな言語との系統仮説が生まれる原因ともなっている。

## 文字と書字伝統

ドラヴィダ語族の4つの主要言語は、すべてブラーフミー文字に遡る独自の文字をもつ。カンナダ文字とテルグ文字は、早くからプラークリットやサンスクリットの表記に充てられていた、ブラーフミー文字の地域変種をドラヴィダ系言語の表記に適用したものであるが、南方のタミル語とマラヤーラム語は、紀元前後からドラヴィダ系言語の表記に特化したタミル・ブラーフミー文字に起源をもつ、ヴァッテルットゥ文字で書かれた。サンスクリットを表記する文字としてブラーフミー文字の変種であるパッラヴァ・グラント文字が導入されると、ヴァッテルットゥ文字の字形デザインをこの文字に合わせたタミル文字が成立した。マラヤーラム語地域では、ヴァッテルットゥ文字とグラント文字の併用を経て、グラント文字をマラヤーラム語表記に充てたマラヤーラム文字を発達させた。パッラヴァ朝期以降、近代に至るまで、インド南部では書き言葉としてサンスクリットが汎用性をもっており、タミル文字以外の3つの文字はサンスクリットを表記する文字としての性格を維持した。

## 3 ムンダ諸語

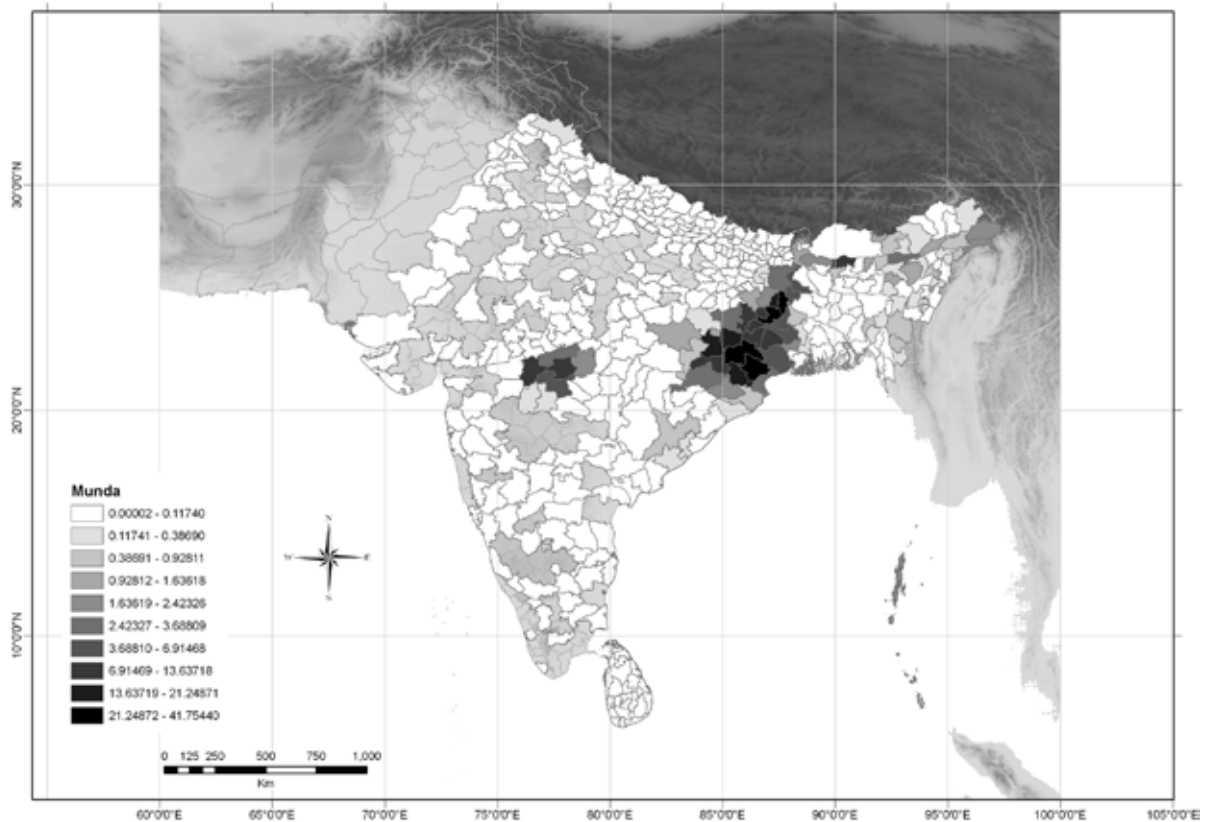
長田 俊樹

総合地球環境学研究所

### 話者人口

ムンダ諸語は、話者数から見ると、インド・アーリア諸語、ドラヴィダ諸語に続く、南アジア第三の言語グループである。インドでは、その話者の多くは指定部族(Scheduled Tribe)として、種々の法的保護制度が適用されているが、すべての指定部族がムンダ諸語を話すわけではない。

インドの1991年の人口統計では、ムンダ諸語の母語話者数は、総人口の1%ほどである。ムンダ諸語のなかで、最大の話者人口を誇るのはサントル語で、同じ統計によると、521万人である。バングラデシュやネパールの人口統計にはムンダ諸語の分布がはっきりとしないが、Ethnologueによると、サントル語話者はバングラデシュに14万人、ネパールに4万人の人口が報告されている。次に多いのはムンダ語である。1991年センサスにはMundaとMundariが別々の言語として報告されているが、前者が民族名、後者は言語名とみるのが一般的で、しかも言語学的にその2つの言語がことなるとする記述も報告もないので、同一のムンダ語とみなす。ホー語がこの2言語に続く話者人口をもつが、サントル語、ムンダ語、ホー語(ケルワリア諸語を形成する)の三言語はお互いに意思疎通ができるほど近い関係にある。とくに、ホー語は



ムンダ諸語の分布

Ho Mundaと言われることもあり、ムンダ語で話すとホー語を話せるのかと言われるほどである。言語学的には同一言語の2方言とみなすこともできるが、民族アイデンティティに基づいて別々の言語とみなす。なお、Ethnologueによると、ブミジュ語もムンダ語と同一言語とみなしているが、こちらも民族アイデンティティによって、別の言語とみなす。

ケルワリア諸語と比較すると、南ムンダ諸語はお互に通じることがない。また、ソーラ語とカリヤ語をのぞくと、話者人口は僅少で、レモ語やゴルム語のように、1万にも満たない消滅の危機に瀕した言語もある。

## 言語分布

ムンダ諸語は大きく3ヶ所に分布する。まず、ジャールカンド州にはサンタル語、ムンダ語、ホー語の話者人口数が多い3言語が分布するし、20万以上の話者人口を誇るカリヤ語もジャールカンド州に分布する。次に、オリッサ州のコラプート県やその隣接するアーンドラ・プラデシュ州に分布する。ソーラ語をはじめ、南ムンダ諸語のほとんどはこの地域に分布する。もう一カ所、マディヤ・プラデーシュ州に分布するコルク語である。

ムンダ諸語の話者は、集中して分布するこれらの地域以外にも、英国統治時代に紅茶栽培の労働力として移住させられたために、アッサム州や西ベンガル州のダージリンにも分布している。また、同様に、労働力として、アンダマン・ニコバル諸島にも移住している。

## 文字

ムンダ諸語を書き表す文字は大きく分けると2種類ある。インド・アーリア諸語を書き表す

デーヴァナーガリー文字、ベンガル文字、オリヤー文字の既成文字を用いる場合と、新たに考案された文字を用いる場合である。後者の文字としては、サントル語のオル・チキ文字がもっとも広範囲に使用されている。オル・チキ文字は、ラグナート・ムルムが1925年に考案し、自分で印刷所をつくって、徐々に広めていった。その結果、1979年には西ベンガル州政府が公認し、州政府刊行物をオル・チキ文字で出版するようになった。

## 4 チベット・ビルマ諸語

高橋 慶治

愛知県立大学外国語学部

チベット・ビルマ諸語は、漢蔵（シナ・チベット）語族に属する。漢蔵語族に属する言語は、東アジアから南アジアにかけて広く分布する。このうち、北東インドからヒマラヤ地域を経て北西インドまで多数のチベット・ビルマ諸語が分布している。

### 地域分布・話者人口

南アジアにおいてチベット・ビルマ諸語に属する言語は、パキスタン北部、北西インド、ネパールおよび北東インドに集中している。主にヒマラヤ地域の山間部に多くの言語話者が居住しているが、ビルマ国境地域の山間地帯にも種々の言語がある。

### 歴史・社会

チベット・ビルマ系言語を話す人々の歴史についてはわからないことが多いが、古くに王国を成立させた民族もいる。チベット語の方言を話す人々が西部でラダック王国、東部でシッキム王国、ブータン王国を建国した。また、メイティ語を話す人々がマニプールで王国を建てた。チベットからの影響で仏教を信仰する民族が多いが、マニプール王国ではヒンドゥー化した。生業は、主として農耕であるが、家畜の利用も多い。

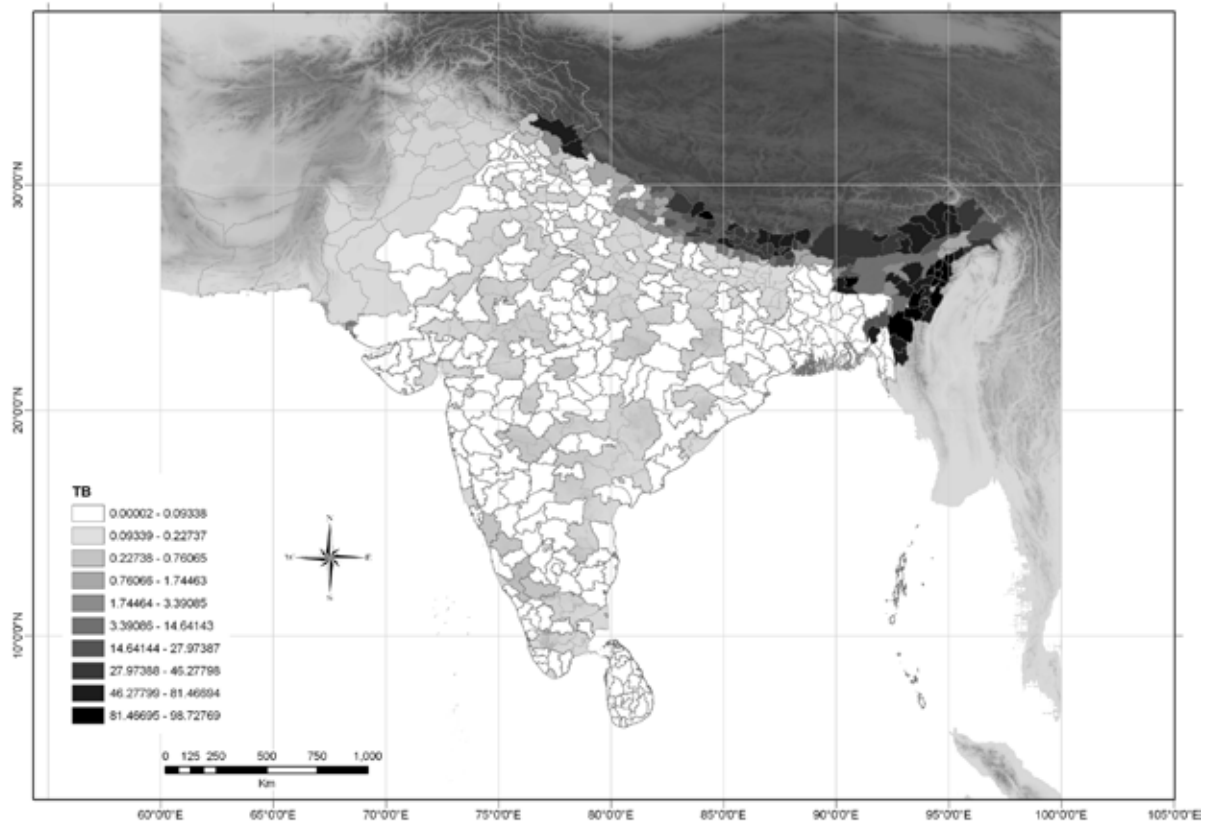
### 類型の特徴

一般的に、チベット・ビルマ系言語（さらに漢蔵語族）の言語的な特徴を単音節語であり、形態変化がないととらえることが多いが、むしろ、南アジア地域（とくにヒマラヤ地域）に分布するチベット・ビルマ諸語は、少なくとも共時的には形態変化が豊富で、多音節語を多く含んでいる。名詞は、文の中での意味に基づいて適切な格形式を取り、動詞は、時制、人称その他の要因によって形態変化する。とくに主語の人称を表す動詞接辞はかつて「代名詞化」と呼ばれ、ヒマラヤ地域の言語の特徴とされた。また、主語の人称だけではなく、目的語を標示する接辞をもった言語もある。形態統語的特徴の一つとして、能格構文を取る言語がある。また、目的語に一次目的語と二次目的語の区別をなす場合がある。

### 文字・識字

チベット語の方言はチベット文字を使うが、独自の文字をもつ言語は少なく、必要に応じて





チベット・ビルマ系言語の分布

デーヴァナーガリー文字を利用する言語や、アルファベットを使う言語もある。また、自らの言語を文字で表記せず、記録はすべてヒンディー語などの優位の言語の文字によって行う場合もある。現在は、学校教育が普及しつつあり、若い世代では、口頭でもヒンディー語を使うが、書き言葉はヒンディー語を使うことを当然とする向きもある。その意味では識字率が高くなりつつあると言えよう。

### グループ分け、地域分布

各言語の分布は複雑であるが、おおまかには、中国チベット自治区との国境付近に東西を通じてチベット語の方言を話す人々があり、それに重なるように、西から、西ヒマラヤ諸語、タマン諸語、ライ・リンブ（キランティ）諸語、ボド・ガロ諸語、クキ・チン諸語などが知られている。

### 【引用・参考文献】

- Cardona, George (1974) 'The Indo-Aryan Languages', in *Encyclopaedia Britannica* (15th edition) vol. 9. pp. 439-50.
- Cardona, George and Dhanesh Jain (2003) 'General Introduction', in G. Cardona and D. Jain (eds.) *The Indo-Aryan Languages*. Routledge, London. pp.1-45.
- Masica, Colin P. (1991) *The Indo-Aryan Languages*. Cambridge University Press, Cambridge.
- van Driem, George (1991) Report on the First Linguistic Survey of Bhutan, Thimpu: Royal Government of Bhutan. Cited in G. van Driem (2001) *Languages of the Himalayas: An Ethnolinguistic Handbook of the Greater Himalayan Region*, vol. 2. Brill, Leiden. p. 871.